
休めよ、剣

君影紫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

休めよ、剣

【Zマーク】

Z5852K

【作者名】

君影紫

【あらすじ】

魔王を倒す勇者を決めるために行われている“勇者戦”。魔物との混血である主人公、梓木・フィーネンド・邦彦は世界平和の為ではないけど、不本意ながらも“勇者戦”に出場する…そんな御噺。

一度目の決意

この世界に名前をつけた者がいるだろうか。今生きる人々が暮らす世界は、彈指よりも速い時間が連續し、ここにあり続けた。何度も何度も続く時間の確率は、知らない誰かの気まぐれのような果敢ないものだという。

そんな世界の流れる様は、まるでありきたりな小説を読んでいるかのようだつた。町の外は魔物だらけ。人々は恐れ、討伐に精を出す者、魔物たちの弱点を知る者、より強い武器や防具を作り出す者、人間にはない力を科学技術で補おうとする者…とそれらは確実に増えてゆき、そしていつの間にかは当たり前となつた時代へと変わつていつた。

そうした後、人々は魔王なる存在を知る。魔物たちを統べる其の人物は、人間では到底敵わない力を持つていた。それから人々は絶望し、とある国王が苦し紛れに考えた“勇者戦”に希望を託すこととしたのだった。

それはこの世界、「ジャストケイオス」の名がついた頃だつた。

あれから150年ほど経つた、ある冬の事。青年は歴史の授業をぼんやり聞いていた。彼ら風萌学園高等学校の生徒らは、やはり魔王を倒すため学び舎の扉を叩いた者たちである。青年もまた、そうであった。

青年の名は、梓木・フィーネンド・邦彦。フィーネンドという魔物の名前が入つてゐるのは、平たく言つと“^{テストネーム}実験台名”で、魔物と人間の遺伝子を掛け合わせた混血であることを示すため、その魔物の名前を入れることが義務付けられている。

実験台名を持つものは少なくない。寧ろ人間では持ち得ない能力を持ち、戦闘でも有利となるのだ。魔物の血が流れていればそれだ

けで身体能力も上がり、自然治癒能力もかなりのもの。ただ、人間に比べて成長するスピードが遅く、老い難くあれど、裏を返せばなかなか上達しないとも言える。また、人為的な遺伝子は子へ孫へ伝わるごとに薄らいでゆくもの。**混血**であり続けるため、邦彦の前々代（祖父）あたりからより濃く凝縮した**新混血**に進化している。

^i 5 6 6 4 — 7 6 7 ^

「あー、梓木。君は出場しないのか？勇者戦に。」

授業が終わり、少し長い休み時間。図書館へと赴く邦彦を、コツジユームという魔物との**混血**の教師、日詰が呼び止めた。**新混血**からは見られないが、**混血**世代には外見に魔物の特徴が表れることがあるらしく、その日詰もコツジユームの鎖の肌質をしていた。

「……え、考え…させてください。まだまだあらゆることにおいて未熟ですから。」

邦彦は勇者戦なんてものに、実は興味がなかつた。親らの希望で風萌学園に入り、取敢えず期待に応えようとは思つたが、魔王を倒そうなど野望は違う誰かにと任せていた。

日詰はやれやれと苦笑を漏らし、持っていたパンフレットを手渡す。

「これで何回目だらうな、君のそつけない返事は。未熟なんて謙遜にしか聽こえない。君は風萌学園創立以来最高の成績だよ。きっと君がファーネンドとの**新混血**であるからかも知れないな。…用を通してくれ。未来の勇者よ。」

そのまま日詰は踵を返し、西の研究室に姿を消した。邦彦の手元に残ったパンフレット。“騎せよ、剣”とレタリングされたタイトルの下に、前第14回戦勇賞者の少年の勇ましい写真がプリントされている。どうやらその少年は弱冠16歳、最年少で優勝するという快挙を成し遂げたらしい。

「…名前は…楚実・シガラス…透…。**混血**か…。」

パンフレットをざつと読むと、透少年のことを書かれていた。シガラスという魔物のカットも一緒に載せており、彼とシガラスは先

の尖った耳が似ていた。彼もまた、風萌学園に在籍していたらしい。

廊下で佇んでいると、後ろから邦彦を呼ぶ声がする。よく通る声に振り向くと、邦彦と割と仲のいい青年が爽やかに駆け寄ってきた。

「邦彦ー。いいトコにいた。図書館行くんだわー。ちよつと付き合つて。」

にかつと笑つた青年に実験台名はついていない、小野寺光輝といふ普通の人間である。光輝は性格のよさから、邦彦とも打ち解けることができたのだ。

「小野寺…今度はなんだ？新種か、新製品か、若しくは新戦法か？」

邦彦は何度か光輝に付き合わされているため、田論見くらい読める。併し今回はちょっと違つようだ。光輝は舌を出して内緒、と笑つて見せた。別に断るなんて今更だから、今回もほいほいついていつた。

「おー？邦彦、勇者戦出るの？あ、口説に言わたんだろう？邦彦サン優等生だからー。」

腕に抱えたパンフレットを見て、光輝が茶化す。光輝が読ませて、と邦彦にいつてみると、割と簡単に差し出した。すぐ返すねー。と笑うと、パンフレットを眺める。

「あ、邦彦。場所、いつもの所だよー。」

既にパンフレットに集中した声で邦彦に声かける。ああ、と返事をすると、んー…。と間延びした返事が返ってきた。

いつもの所、の研究室に辿り着いた。本来「リコスマスの会」というよく分からぬ同好会のための部屋だったが、誰もいなくなつたので光輝が許可を貰つて使用している。研究費はほぼ自費だそうだ。

「ふーー、邦彦ありがと。やっぱ一混血^{ミックス}じゃない俺には望みな

いや。邦彦頑張るのかね？」

パンフレットを返されると、光輝は困ったように笑つた。邦彦は何も返せなかつた。出場を決めたわけではない。それでも光輝は勇者戦を邦彦に薦めることはしなかつた。

研究室、といつても光輝が気まぐれに内装を変えるため、たいした荷物は置いてなかつた。用務員さんから借りたらしい脚立が隅のロツカーやの隣に立て掛けられており、あとは見覚えのあるテーブルとチェアが真ん中を陣取つていた。光輝は邦彦に着席を促すと、ロツカーやからなにやら書類を取り出した。いつもならそれは新戦法だが、今回は光輝の顔がいつもより真剣だつたために、邦彦はいつもより緊張した態度で話を聞くことにした。

「実は…ね。今まで勇者の名を語り、魔王に挑んだ者たちのデータをそーいうパンフレットからまとめたんだ。」

光輝は書類を差し出すと、文字を指でなぞる。

「…勇者戦つて10年に一度、魔王を倒す勇者を選ぶため催されるだろ？実際、勇賞者は魔王討伐に向かっているんだ。どこに、と言えば精靈たちが誘うとかでよく分からんんだけど…。兎に角、まだ続いている以上、魔王は倒されていないわけなんだよ…。今まで14回行われてきたけど、魔王は生きてるし、勇者は誰一人として帰つてきていない。そして何より、近年の魔物の強さが半端じやない！だからさ…、本当は…邦彦に出てほしくない、んだ…。勇者戦…。」

光輝の表情がだんだんと曇る。ついには俯いて肩を震わせた。何かを堪える聲音で邦彦に告げた。

「…邦彦は知らないだろ？俺…邦彦のソウルパートナーなんだ。うーん、マネージャーって言つか。情報を提供したり、専用の武器なんかを作つたり。…勇者にするためだよ。…でも言えなかつた…勇者戦に出てつて…。言いたくなくて…。それで…ソウルパートナー、辞めさせられるらしい…から…黙つてごめん。」

光輝が袖で涙を拭う。感極まって泣いたようだ。

「…邦彦とは友達で居たかつた……。ソウルパートナーじゃなくなつたら、俺退学だから逢えなくなる…。」

光輝の話によると、風萌学園に在籍する人間の大半はそのソウルマネージャーらしい。だから混血ミックスと人間では受験内容が違うのに、同じクラスに混ぜられるわけだ。邦彦は、魔王を倒すことに興味はなかつたが決心した。

「…小野寺、いや…光輝。ソウルパートナーっていうの辞めなくていい。勇者戦に出るから、俺。」

稀に見る邦彦の真摯な眸に、光輝は息を飲んだ。

一度目の決意（後書き）

… 1話目です、わりとめんどくさく書いてます。
雰囲気重視と言つ苦い逃げ方しました。
RPG風味効かせました、これでも…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5852k/>

休めよ、剣

2010年10月28日03時31分発行